
花帰葬～唯一の願い～

黒鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花帰葬〜唯一の願い〜

【Nコード】

N5081B

【作者名】

黒鷹

【あらすじ】

黒鷹の唯一の願いとは、一体なんだろう……。彼にとって、最高の幸せとは一体、何なのだろう……。

君は、いつも私を裏切って、自ら命を捨てる道を選ぶ。

そのたびに私は、何度も、何度も、君を止めた。

なのに、どうしていつも………。

それならいつそ……私も殺してはくれまいか……？

なあ……玄冬………。

「黒鷹……。俺は、花白のところに行こうと思う。」

「遊びにかい？おすすめてはないね。」

「違う。」

「じゃあ、買い物かな？あのちびっ子に荷物持ちは少々無理が……

」

「違う……！」

台所にたつて、いつものように私の朝食を作っていた玄冬が、そう切り出してきた。

後ろを向いているから顔は見えないけど、多分、いつものように無表情だろう。

「俺は……この世界を壊したくないんだ………。」

「まさか、死ににいくつもりかい？」

「………ああ。」

「それはまた、酷な事を言うねえ。」

「な……何………」

「あのちびっ子も私も、君のことが好きなのだよ？まあ、多少愛情の違いはあるけれど。そんな私に死ぬ事を宣言し、そんなちびっ子に君を殺させるつもりかい？」

玄冬は、ぴたつと包丁を止めた。

そして私のほうをゆっくり振り向く。

案の定、彼は無表情。……と、思いきや、少し悩んでいるように、顔は歪んでいた。

「どうかしたかい？」

「じゃあ、この世界を見捨てろっていうのか？お前は。」

「立場的に、私はもともとそっち側だからねえ。正直、この箱庭が続こうが壊れようがどちらでも構わないのだけど、私の可愛い息子がむざむざ殺されるのは忍びないだろう？」

「お前……絶対に間違っている。」

「そうかい？」

玄冬の瞳は、いつにも増して真剣そのものだった。

死ぬ、と言っていた人間のする瞳とは、ここまで力強いものなのだろうか。

「俺1人の命と、この世界の人間全員を、同じ秤で計れるはずがないだろう。」

「元はといえば、殺しあった人間達が悪いんだ。その責任を、君1人に押し付けるなんて、図々しいにもほどがあるとは思わないのかい？」

「それは……」

我ながら、意地悪い質問をしていると思う。

仮に、玄冬が図々しい、と思っていたとしても、玄冬自身、どうすることもできないだろう。嫌だ、といって誰かに責任転嫁することなんて、不可能だ。

「くーろと、遊びにき……」

「玄冬、いつそ、壊してしまわないか？この、汚れきってしまった世界を、白く清めてみようじゃないか。」

「無理だ……俺には……そんなこと……」

「何だい、情けない。他にも、こう思っている人間がいるかもしれないのだよ？そう考えれば楽なものだろう？君は、ここで平凡に暮

らすだけでいいのだから。」

そして、今も、滅んで2人きりになってしまったあとも、2人で暮らせばいい。

私たちには、何の影響もない。

そう・・・何一つ・・・。

「さあ、玄冬。朝食を頼むよ。あ、野菜は抜いてくれよ?」

「・・・言っな。」

「ん?」

「もう・・・言っなっ!俺を・・・俺を肯定なんかするなよ!!」

「どうしてだい?私は君を守る黒の鳥だよ?そんな事を言われちゃ、仕事がなくなってしまうだろう?」

「俺を守るだと・・・?さっきからお前はっ・・・俺を守るわけじゃなく、この世界を壊すことを願ってるじゃないか!!」

「玄冬、落ち着いて考えなさい。君を守るということは、つまりこの世界を壊すということだろう?私は間違っただけだよ。」

「もう俺を苦しませないでくれっ!!」

・・・ドッ・・・

鈍い音が響く。

おや、玄関の扉が開けっぱなしじゃないか。誰だい?最後にあけたのは。

・・・なんだ?この感覚は。熱い・・・痛い?

「・・・うっ・・・」

「この・・・バカ鳥・・・」

私の腹部を、後ろから、銀色の輝く剣が貫いていた。

そしてその剣の柄をしっかりと握っているのは、赤毛のちびっ子。

「おや、ちびっ子・・・今は・・・冬だ・・・よ・・・」

私は、がらにもなく崩れ落ちた。

「黒鷹!!」

先ほどまでは、私の言葉を聞かたびに頭を痛めていた玄冬も、今は蒼白して私に駆け寄る。

今、この瞬間でさえも、幸せに感じてしまう私は、おかしいのだろうか。

「おい！しつかりしろ！黒鷹！」

「・・・聞こえているよ・・・。耳元で怒鳴らないでくれ・・・。」

「バカ鳥・・・このくらいじゃ・・・死なないん・・・だよな・・・。？」

「何を言ってるんだい、ちびっ子・・・私は鳥だよ？死ぬに決まってるじゃないか・・・。」

私はちびっ子の手を一瞬だけ強く握った。

「白鼻を、あまり困らせないでやってくれ。わかったね・・・？」

「う、うん・・・。」

「お前、まさか死ぬ気なのか！？黒鷹！」

死ぬ気も何も、私は君とは違うのだよ、玄冬。

永遠では・・・ないんだ。

すみません・・・主よ・・・無理を言ってここに残ったというのに・・・。

最後まで・・・見届けそうにありません・・・。

「玄冬、君は、好きに生きるといい。」

「何・・・言ってるんだよ・・・おい！おいっ！」

「黒鷹っ！！！」

全く、ちびっ子には困ったものだね。

ずっと、永遠に2人で生きるという願いも絶たれた今、私には、玄冬に殺される、という願いしか残されていなかったというのに、それさえも奪うとは。

本当に・・・残酷な救世主だ。

君は・・・結局どうしたのかな。

多分君のことだから・・・やっぱり・・・今までと同じ事をしたんだろうね。

でも君がそれを望むなら、きっと、それが1番正しかったんだろうと、私は思うよ。

いつまでも、愛しているよ——玄冬。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5081b/>

花帰葬～唯一の願い～

2010年10月20日17時57分発行